

団塊世代・元気高齢者地域活性化推進協議会（第7回）議論要旨

＜議題＞

- 1 これまでの検討内容の整理
- 2 気運の醸成について
- 3 企業とのパートナーシップ
- 4 その他

＜主な意見＞

- 1 これまでの検討内容の整理
 - 現状では地域包括支援センターは高齢者のためだけのもの。近寄りやすい、いろんな壁がある。それを乗り越える仕組みが必要で、その仕組みを区市町村がバックアップできるかがかぎ。
 - ふらっとハウスや地域サロンのような地域のたまり場は非常に大事。高齢者も子どももいて、世代間交流ができるような制度的な仕掛けができるどうかポイント。
 - 拠点をつくっていくときに、武蔵野市が実施している「テンミリオン事業」のように、民家を活用できるような仕掛けが制度的にできないか。市民感覚としては、自分の家を拠点として提供したいと考えた時、税制上のバックアップがあるかどうかで全然違ってくる。税制上の問題は東京都しかできない。
 - 自助・互助・共助・公助は、行政の基盤整備があってからこそやりやすくなるので、論理的に整理した方がいい。
- 2 気運の醸成について
 - シンポジウムの基調講演は女性で、なるべくソフトな人がよい。
 - シンポジウムに関しては、最初に基調講演を著名人にやっていただいて、実践事例については、2部で具体的につめる形で行う。

- 団塊世代は多様な価値観を持つ世代。地域や地縁に縛られたくないという思いをもった人が多い。またダイナミックなエリアの発想やグローバルな視点からセカンドライフを考える人も多い。しかし海外に目を向けるのは60代ぐらいまで。70代になると海外ではなく地域に目が向いてくる。70を超えた方にどう刺激を与えられるか、という点も触れる必要があるかもしれない。
- 特に男性は、地縁・血縁という言葉に拒否反応を示す。これからは従来の地域、PTAという枠だけでなく、活躍できる場面は多様にあるということイメージできるような基調講演がよい。
- 「地域」や「地域支援の担い手」という言葉をストレートに出すより、少し緩やかにした方がよい。
- お隣同士の「地縁」ともう1つの「チエン」。知恵の知の縁「知縁」。「地縁」「知縁」という言葉を使って、行政エリアを超えてつながる新しい地域をイメージできるような言葉を作れるといい。
- 最終報告書は、なるべく片仮名を使わない形で作成する。
- 団塊世代なので70歳以下の方が対象だが、高齢者の8割は元気な方。70歳以下の人を75歳以上の元気な方が応援するというスタンスがあってもいいのでは。
- パネルディスカッションでは、団塊の世代が培った能力や技術を地域は待っているし、地域で活かすことができる、非常に役に立つ、というメッセージを是非入れて欲しい。
- 団塊世代は、コミュニティビジネスや有償ボランティアに魅力を感じているので、そのモデルになるような人もいとよい。
- パネリストは4人。団塊の世代のモデルになる方で、男性だけでなく女性を1人入れた方がよい。女性の視点での問題提起も必要。
- 地域活動に参加した男性は、「ありがとうと言ってもらえるのがこんなに気持ちがいいものなのか。生きがいを感じます。」と非常に素直な意見をおっしゃる。そういう体験をした男性にパネリストになってもらい、発表してもらおうとよい。

- パネルディスカッションではなく、4人がトークリレー形式で体験発表や情報提供をしてもらい、いらした方に「地域にちょっと足を踏み出そうかな」と思ってもらえたら、それで十分。

3 企業とのパートナーシップ

- 八王子市では「市民活動支援センター」に東電が人件費を負担して職員を派遣している。また NPO 法人が世界的なチェロコンテストを目指し活動しており、そこに多数の企業が参加している。中でも大がかりなのは、オリンパスが協賛して、地域で音楽フェスティバルを発展させようという活動。市と企業の協力体制ができている。
- IBMのボランティア活動は、社員とOBがやっている。OBの中には、地域の防災ボランティアに参加しているうちに、NPOを立ち上げた方もいる。日本の伝統的な企業はOB会がある。会報を作成してその中で地域活動が成功している事例を紹介している例が多い。
- OB会は、バラバラの地域に住む人の集まり。地域活動という切り口は難しいかもしれないが、逆に自分の地域に目を向けるきっかけを与えるような情報を流していくことが大事。
- 企業が社会貢献をする場合、継続性とPR性が必要。単発的な協賛金を出す、お祭りに寄附するという活動は、企業として望まない。
- 会社の中の高齢者に特定して活動してもらっている事例は難しい。東京は本社機能が集まっており、人事が常に動いている。
- 大企業はセカンドライフの講習会をやっていたが、最近は「セカンドライフをどう過ごすかは個人の自由」という風潮があり、講習会をやる企業が少なくなった。また定年前講習は、厚生年金や自治会に入りなさい、という話だけで、これからの自分にどんな活躍の場があるのか、案内されなかった。改めて企業と連携し、会社を退職する前にセカンドライフをどう過ごすか、地域に出て何に貢献できるかを知らなければならない。
- シニア情報サイトで新しい高齢者像、地域が求めている人材像、スキル等を発信することが必要。企業側も情報を提供されれば新しいアイデアが出てくる。

- 高齢化社会の中、これからの企業はマーケットとして男性のシニア層のライフスタイルをつかんでいく必要がある。企業にとっても地域にとってもお互いに利益になることなので、情報はどんどん流した方がいい。
- ボランティアセンター武蔵野がやっている「お父さんお帰りなさい」は今年10回目を迎えた。以前は男性が一人で参加していたが、最近は奥さんも一緒に来て一緒に考えるケースが増えている。
- ボランティアセンター武蔵野は、運営委員に横河電機の社員に入ってもらっている。またボランティア助成金も出してもらっており、大変助かっている。地域活動をよくご理解いただいている。